

## 目 次

第 21 回大会関連	P1	シンポジウム報告(2)	P13
大会参加記	P1	ソシオロジー Rooted in Life	P16
第 30 回総会報告	P10	事務局からのお知らせ	P25
シンポジウム報告(1)	P12		

---

**第 21 回大会関連**

事務局

日中社会学会第 21 回大会（大会実行委員：黒田由彦会員、西原和久会員）が、2009 年 6 月 6 日と 7 日、名古屋大学環境総合館レクチャールームにて開催されました。

会員の方々からご寄稿いただいた大会参加記を通じて、当日の熱気溢れる報告や討論の様子を以下にご紹介申し上げます。

**大会参加記****第 1 日：6 月 6 日（土）****開会式****松木孝文（名古屋大学）**

開会式では、最初に事務局および中村則弘会長から開催校である名古屋大学に対して感謝が述べられた。続いて、一年間の成果として日中社会学叢書の発刊、中国との学术交流の活発化について報告される。成果と同時に様々な課題が山積していることについても述べられ、会員の積極的な協力を求める旨が鲁迅の「地上に元々道はない。人が歩けばそこが道となるのだ」との言葉を借りて告げられ、第 21 回大会の幕が切られた。

**特別講演****「マックス・ヴェーバーの比較歴史社会学における欧米とアジアとくに中国」****講 演 折原 浩（東京大学名誉教授）****司 会 西原和久（名古屋大学）****長田洋司（早稲田大学）**

第 1 日 13:10 からは、マックス・ヴェーバー研究の権威であられ、多数の研究業績をお持ちの東京大学名誉教授折原浩先生をお招きして、特別講演をしていただいた。そして、司会は、今回の大会開催校である名古屋大学の西原和久先生が務められた。

今回、折原先生は、マックス・ヴェーバーの最も有名な業績のひとつである『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を取り上げ、

「その内容的骨子について」、「そこに認められる限界を、ヴェーバー自身は、その後どう乗り越え、なぜ、またどのように、比較歴史社会学を構想したのか」、「その視点から、中国の社会 - 文化の歴史的特性を、(欧米、インド、ロシア、日本などと比較して)どう捉えたのか」、「わたくしたちは、かれヴェーバーの構想をどう受け止め、どういう方向に「パラダイム変換」を企てるべきか」という 4 つの項目に分けて大変有意義なご講演をなされた。

先ず、では、欧米近代の「市民エートス」、「職業義務観」が「禁欲的プロテスタンティズム」にそのルーツを求めるとし、宗教上の合理

的禁欲が現世内で作用して「事業上の成功」と「富」という「副産物」をもたらすことによって、次第にその「事業上の成功」が目的に転嫁されるようになるという。それが、「(近代)資本主義の精神」の誕生につながり、また、カルヴァン派の「二重予定説」の教理が「金銭上の成功」によって「神に選ばれた」と自惚れる人間類型を生み出してしまったとした。そして、この論文について、ヴェーバー自身は、「宗教上の運動」が職業倫理を介して「物質文化の発展」に及ぼす影響のあり方と方向を究明するに過ぎないと断じ、最後に「わたしはもとより、一面的な『唯物論的』歴史観に代えて、これまた同じく一面的な、文化と歴史の唯心論的な因果的説明を定立するつもりは、毛頭ない。両者とも等しく可能であるが、予備研究としてではなく、結論として主張されると、等しく歴史的真理には役立つ」と結んでいる。折原先生は、それを踏まえて、「等しく歴史的真理に役立つ、唯物論的また唯心論的な予備研究」とはどういうものか、そこでは、唯物論と唯心論との対立が、どのように止揚され、いかに「歴史的真理に役立つ」てられるのか、という問いを立てられた。

そして次に、折原先生は、で「倫理論文」には「予備研究」の段階が欠落しており、対象領域が「経済倫理」と「宗教」に限定されると指摘したうえで、1906年に発表された論文「文化科学の論理学の領域における批判的研究」(「マイヤー論文」)の手法を「倫理論文」に適用し、非西洋文化圏との比較を行うことを述べられた。そうして、比較歴史社会学であるヴェーバー社会学創生の流れについて語られた。

では、ヴェーバーの非西洋文化の総体にアプローチする一般方針を、「普遍的諸要素の個性的互酬 - 循環構造」として捉え、そのうえで「普遍的諸要因の個性的布置連関」に因果帰

属する方法 - 理論構想であると指摘した。そうして、ヴェーバーの中国論に入った。先ず、近代資本主義発展に有利な経済的諸条件としての「私人の手中への貨幣集積」と「流動可能な人口の大量増加」について、中国では18世紀の初頭以来、充足されていたにもかかわらず、近代資本主義の発展は見られなかったという。そして、その原因を氏族(「宗族」)勢力の存在が阻害要因となっていたと分析され、その氏族勢力の消長を左右したのが、「政治 - 支配体制」と「宗教性」であったと指摘された。

そして最後の では、「戦後近代主義」が「ゼロト主義的反動」を導き、それが、ヴェーバーの「アジア社会論」に対しても、「欠如理論」「西洋中心主義」であるというレッテルが貼られて非難されているとした上で、先生ご自身、「倫理論文」以降の普遍史的比較歴史社会学に光を当てて、その意義を説き、日本のヴェーバー研究を成就したような非難から解放させようのご尽力なされたという。21 - 22世紀の人類の課題は、欧米近代の「経済力と軍事力との互酬 - 循環構造」に代えて、学問としての比較歴史学を進展させ、「学問力 - 文化力 - 平和友好力の互酬 - 循環構造」のようなものを創り上げることであるとまとめた。

フロアからは、「近代と現在のジュネーブ、チューリッヒ、名古屋の商業倫理について考えた時、社会学として学んだような、地域が思想をつくり、それに人が媒介するという形態が当てはまるのか当てはまらないのか、地域に両極端の人がいるのか？両方の思想があるのか？」、「中国に関して、21世紀に入って経済発展を続けて民主化も進む一方で「和諧社会」の思想も含めて伝統主義に回帰する傾向が見られる。そうした動きについて宗教との関連でどのようなお考えをお持ちであるか？」、「換骨奪胎した新しい「パラダイム変換」とは、具体的にどのようなものか？人間の原点をどのようにお

考えになるか？」といった質問が出された。

### 松木孝文（名古屋大学）

折原浩氏「マックス・ヴェーバーの比較歴史社会学における欧米とアジア・とくに中国」

第21回の記念すべき特別公演に先立ち、西原和久司会より折原氏に関する紹介が行われた。司会曰く、「折原氏と言えば、雲の上の存在」であったという。イントロダクションは、当時の司会の、折原氏の著書との出会いから、現在に至るまでの氏の業績といった形で時代を追って進められ、フロアを続く折原氏の講演へと引き込んでいく。

そしていよいよ、折原氏の講演となる。まず、折原氏の中国との交流経験を通して、日中間の社会学の交流及び、中国の思想的学問状況の推移が語られた。講演に当たってはフロアには47ページにも及ぶ重厚なレジュメが配布されており、印象記の紙幅でその内容をまとめることは、難しい。詳しい内容をまとめることはできないが、講演の流れは、まず、ヴェーバーの代表作であり、比較歴史社会学の出発点ともなっている「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を取り上げ、その内容骨子を説明し、そこに認められる限界をヴェーバー自身がどう乗り越え、なぜ、また、どのように比較歴史社会学を構想したのか、その視点から中国の社会文化の歴史的特性をどうとらえたのか、われわれがヴェーバーの構想をどう受け止め、どういう方向に「パラダイム変換」を企てるべきか、を論じる構成となっている。また、実践にも踏み込み「学問力 文化力 平和友好力の互酬」の形成を提唱している。講演の後には、「現在の中国における宗教と社会をどう考えるか」「人間存在の視点とは何か」「現代の世界各国の文化の違いをどのように考えればよいか」等に関して質疑応答が交わされた。

折原氏自身の語る通り、本講演の内容は、ま

さに「ヴェーバーの比較歴史社会学の真価」を、しかも分かりやすく伝えるものであると感じられたが、とりわけ印象的だったのは、氏をしてなお「ヴェーバーは学び切れない」とする点であろう。

### シンポジウム PART 1

「新しい段階に入った日中交流の現在」

コメンテーター：浅野慎一（神戸大学）

司 会： 黒田由彦（名古屋大学）

- ・ 林麗（中国大使館参事）「日中関係の現在」
- ・ 西原和久（名古屋大学）  
「長野県八ヶ岳東南麓の外国人研修生  
日中 / アジアへの新しい視点」
- ・ 南 誠（日本学術振興会・民族学博物館）  
「日中関係と『中国帰国者』『中国残留  
日本人』の過去、現在と未来を手掛りに  
考える」

### 首藤明和（兵庫教育大学）

中国大使館参事の林麗氏の講演では、中国政府の立場から、多元的な日中交流の必要性が、熱心に語られた。政治、経済、社会、文化の各領域における交流が必要であり、環境、福祉、医療など、人びとの生活に密着した課題について、日中双方の交流と理解、協同と繁栄が必要であると説かれた。

当然、日中交流の担い手は、生活者自身が中心となってくる。まさしく「日中関係の現在」は、「生活」をひとつの機軸に加えて展開する、歴史上経験したことのない新たな局面を迎えているといえよう。それゆえ、既に、「日中交流」は、「社会過程」としても捉えるべき日常的世界なのかもしれない。そこでの解釈や判断の基盤も、国を基礎とした価値規範や政治的経済的利害に留まらず、生活や身体に基づいた新たな基盤が必要とされている。

西原和久会員の報告は、長野県八ヶ岳東南麓の外国人研究生を主な事例として取り上げ、「ポスト・グローバル化」時代の「社会」の現状と変容を把握するとともに、「社会」をめぐる社会学的思考の再検討や社会学的な社会構想を通じて、「新しい段階に入った日中交流の現在」を検証するものであった。

西原会員は、川上村などの事例も参照しつつ、研修制度の一般的問題点(日本の国際競争力・国際貢献・国際化・差別にかかわる問題、「生」のための「食」の問題、日本の「中間」世代との「共生」の問題)や、研修制度自体の問題点を整理した後、これら諸問題を越える可能性を秘めた、いくつかの取り組みを紹介する。すなわち、「有機農法をめざす農家」、「観光化を模索する人びと」、「引き揚げ開拓者の試み」とともに、「村主導による、『食の安全』を掲げた農業研修生の積極受け入れ」などの取り組みである。

「食の安全」を掲げた農業研修生の積極受け入れに対して、西原会員は、「国際競争・国際交流」から「国際協力・人際交流」への変化を抽出して、「ヨコの公共性 = 脱国家的共生」のひとつのモデルとしての可能性を探るとともに、「ポスト・グローバル化時代」を構想、実現するにあたって必要となる社会認識のあり方(近代の諸概念すなわち社会、国家、市民、人権など)の再検討を主張する。本研究は、「社会」を「移動」の視点から脱構築し再構想する壮大なプロジェクトの一環であり、今後の研究の進展が大いに期待される。

南誠会員は、「中国残留日本人」の過去・現在・未来を手掛かりに、「人的移動」、「地域の交流と変化」、「個人レベルの交流と変化」、「歴史の記憶と認識」の4つの視点を通じて、日中関係と「中国帰国者」の実態と可能性を考察するものであった。

まず冒頭で、1945年8月当時、海外には約660万人の日本軍民が居住しており、なかでも

「満洲・関東洲」は206万人あまり(全体の31.27%)に達していたこと、平成19年海外在留日本人が108万人あまりであることと比して、当時の国境を越えた移動がむしろ社会の常態であったことが示された。そして、南会員は、「引揚者」(1972年以前に日本に「引揚げ」た人)、「中国帰国者」(1972年以降に「引揚げ」、  
「永住・定住」した「中国残留日本人」とその家族)、「中国残留日本人」について、日中間の人的移動のあり方を概観するとともに、政治、経済、文化の各社会領域での交流について紹介した。

そして、これら人的移動と各社会領域の交流に媒介されて、「元開拓地」や「僑郷」は、人びとにとっての新たな連帯の器を提供する「地域」(ハルビン市方正県の事例)として立ち上がっている。ここには、国境を跨る「中国帰国者」の生活世界が、一国民史を越える可能性を秘めており、「生活」を基盤に置いた草の根交流(「中国帰国者」の頻繁な往来、海外に在住する同県出身者の投資による老人ホーム建設、定年退職後に老後を送る2世、日本語学校の運営など)が、「感傷の共同体」や「忘却の政治」とは異なる人びとの絆を築き上げる可能性を指摘している。

コメンテーターの浅野慎一会員からは、「人間的解放」の社会的基盤を追及する視点から、3つの報告で提起された「日中交流の現在」が、「諸個人の生活の物質的生産に基づく交通形態の総体」となり得るのかどうかを問うコメントがなされたものと、小生は理解した。

## 第2日：6月7日（日）

### 一般自由報告

司会 首藤明和（兵庫教育大学）

- ・鄭南（中部学院大学）  
「中国におけるキリスト教の発展と社会福祉 撫順のあるキリスト教会を事例として」
- ・李明伍（和洋女子大学）  
「『顔』論的アプローチの意義と課題」
- ・梁萌（名古屋大学）  
「日本人論の受容と批判 現代中国知識人における対日意識の一断面」
- ・宮内紀靖（瀋陽師範学院）  
「中国社会の変遷と将来」

松木孝文（名古屋大学）

自由報告2日目の第一報告は鄭南会員の「中国におけるキリスト教の発展と社会福祉 撫順のあるキリスト教会を事例として」である。本報告は、中国において急速にキリスト教徒が増加する現象を捉え、キリスト教会が社会福祉機能を負う組織として機能している可能性を指摘する。本報告は、国有企業改革、福祉の解体、新しい福祉担い手の希求、その一形態としてのキリスト教の発展という、まさに現在進みつつある流れを、現地で得られたインタビュー調査や画像等リアリティとともに伝えた。報告においても言及されたが、今後どのように動くのか、何故その他の宗教ではなくキリスト教だったのか等、関心広がり、今後更なる報告が待ち望まれる。

第二報告は李明伍会員による、「『顔』論的アプローチ 「顔」の比較社会学に向けて」である。氏は中国の社会研究に関しては経済決定論的な傾向があり、「面子」に関する議論が散漫であることを指摘する。また、「面子」に関し

てなされてきたこれまでの研究に関しては、西欧の枠組みから自由ではなく、こうした局面を脱するために、日本、西欧との対等な比較が必要であるという。フロアからは、「日本との比較をするといっても、日本の「顔」は中国起源ではないのか。歴史的な追跡が必要ではないか」「顔」は中国の実体概念ではないと思うがどのように考えればいいのか」「今後の調査方法はどのようにするのか」、など、多くの質問が出された。特に最後の点に関しては、既に今後の調査方法に関しても計画が示されており、今後実り豊かな成果が期待されるのではないかと。

第三報告は、梁萌会員による「日本人論の受容と批判 現代中国知識人における対日意識の一断面」である。

本報告では、現代中国知識人の対日本人認識と対日本人論認識をそれぞれ提示しながら分析することにより「日本人論」の消費と「再生産」の状況を明らかにしようとしたものである。本報告に対しては、「何故知識人層か」という問いが提出されるものの、「日本人論」という、漠然と存在するものに対し、具体的な担い手を見出して議論することは、実証的な研究へと進めるための筋道をつけることにもなる。その意味でも、本報告は大胆かつ意義深いものであろう。

第四報告は、宮内紀靖会員による「中国社会の変遷と将来」である。本報告では、中華人民共和国の建国以来の社会の状況を、構造と制度・機能を踏まえて、将来のあるべき社会を概括的に考察することを目的としている。氏の報告は、建国以来現代までの歴史区分を示し、それぞれの時代における社会の有り様を、特徴的なキーワードを用いながら示すものである。社会的背景の見取り図を描き、そこに立ち返ること、改めて気付くことがあるのではないだろうか。

## シンポジウム PART 2

### 「日中社会学叢書の成果・課題・展望」

司会 牧野厚史（滋賀県立琵琶湖博物館）

#### ・日中社会学叢書についての紹介

監修者代表：中村則弘（愛媛大学）

#### ・中村則弘編『脱オリエンタリズムと中国文化』

評者：首藤明和（兵庫教育大学）

#### ・石井健一・唐燕霞編『グローバル化における中国のメディアと産業』

評者：本田親史（明治大学・法政大学）

田中重好（名古屋大学）

#### ・黒田由彦・南裕子編『中国における住民組織の再編と自治への模索』

評者：陳鳳（姫路獨協大学）

長田洋司（早稲田大学）

#### ・首藤明和・落合恵美子・小林一穂編『分岐する現代中国家族』

評者：金戸幸子（京都大学）

鈴木未来（新潟福祉医療大学）

#### ・袖井孝子・陳立行『転換期中国における社会保障と社会福祉』

評者：

竇漢卓娜（名城大学・豊田地域看護学校）

松戸庸子（南山大学）

#### ・監修者代表による全体的なリブライ

長田洋司（早稲田大学）

第2日 13:50 からは、シンポジウム Part2 として、『日中社会学叢書』で刊行されたものの中で5つの巻に関する書評セッションが行われた。最終的に予定を約1時間超過するほどに議論の盛り上がりを見せた。

各巻のセッションに先立って、中村先生より、『日中社会学叢書』の全体的な構成についての

紹介がなされた。中村先生は、これまでの西洋のヘゲモニーに対するグローバリゼーションの本土化運動について述べられた香港大学の王向華先生の話を紹介しながら、この叢書においても、それぞれの領域で、自分たちの足元を見つめながらの出来る範囲での新構想の模索を目指したと述べられた。

以下、各巻のセッションに続くが、各評者ともそれぞれ担当された巻を詳細に読み込み、内容説明も非常に具体的で分かりやすいものであった。本議事録では、各内容説明については省略させていただき、主に評者から各編者に出された感想や質問部分を中心として再現させていただく。

最初のセッションは、第一巻『脱オリエンタリズムと中国文化』であった。まず、評者の首藤先生より、社会科学と歴史文化の密接な関連を中国を対象として深めていく全体的な枠組みの中で、アジアの社会学研究の中に潜む「本当に我々はやりたいことを自律的に選んで研究しているのか？」という大きな問題を取り上げているとする。そしてその中で三つの課題、

「適切な概念構築、つまり西洋の基礎理論の中で構築されてきたアジアの実証研究の中で仮説や理論を検証すること」、「現代社会学」、「社会学の方法論」を設定している。そして、この変動する中国社会の現場からどういった知見を得られるかというスタンスが一巻全体に貫かれているとした。それを踏まえたうえで、各論文についての説明がなされた。質問としては、まず、「脱オリエンタリズムと中国文化」という本巻のタイトルに関し、どの中国文化がオリエンタリズムから「脱」しているのか？。また、「近代化と脱オリエンタリズムを、文化を媒介として考える場合に、文化に見る多様な要素をどのように体系化されるのか？」。そして、「巻内に掲載されている北原先生の論文に関連して、多様な近代的制度と中国

文化をどのように捉えるか？」というものであった。

これに対して、中村先生は、中国文化がオリエンタリズムのような動きにならなかったことは、非常に面白い。中国文化こそがオリエンタリズムの作用を受けない適切な例ではないかと考えた。二点目に付いては、モダニティの両義性をもっと素直に前面に出していきたい、相互補完性もあるかもしれない、という印象を持った。北原先生の論文については、非常にユニークで意義深い市民社会論であると評価し、北原先生がおっしゃるような「市民社会」は、中国にも日本にもあるはずだと思うと回答した。

次のセッションは、第三巻『グローバル化における中国のメディアと産業』である。先ず、本田先生がメディアの部分の担当として発言をされた。各論文の説明をなされた後、全体的な印象としては、マスコミュニケーション研究、メディア研究が、どちらかというとな受け手の側に偏っているようだ。また、受け手の側であるオーディエンスに対して、量的研究が多く、もっと質的な研究を増やすべきなのではないかと感じた。全体として歴史的連続性への着目が薄い。そして、イデオロギーの空白化は最初に抑えておくべきだったのではないかと、といった意見を述べた。

続いて田中先生が、産業部分を中心に語られた。中国のような国家と社会がダブっている部分のある状況において、市場化の中で社会が国家からどういう形で分離していくのかを見る参考となる。また、企業を研究しながらその中で国家と社会との関連性を考えるということ、企業そのものを一つの社会として捉え、その内部で国家的なものや社会的なものがどのように分離しているのかを考えるという二つのことがあると思うが、その観点からこの巻は大変面白く、いろいろな知見があったとまとめ

た。

回答は先ず石井先生から、歴史的連続性については確かにその通りで、文化政策や教育政策の変化も影響を与えていると思う。また、中国の独自性はどこにあるのかという部分に関しては、比較研究をしないと見えてこないだろうと回答された。そして、唐先生からは、本巻では、実証研究を中心としたミクロな企業の変化を見てきたのだが、確かにそれだけでは限界があると思う。そして、国家と社会との関係については、中国では国家と社会を切り離して考えるのではなく、第三領域的な発想が必要なのではないか。半国家、半社会というものが一つの社会変動の兆しなのではないか。よって、そうした枠組みの中での全体的な議論がこの巻でも必要だったのではないかと感じているということであった。

続いて、第五巻『中国における住民組織の再編と自治への模索』である。先ず、長田(筆者)の方から、本巻のポイントの説明の後、質問が出された。黒田先生に対しては、「今後の中国都市社会における自治についての展望についてどのようなご意見をお持ちか?」、「共産党の秩序創出メカニズムについて、許される範囲の自治という部分で、住民側がその範囲を超えたものになっていく可能性はあるのだろうか?」という質問を出した。また南先生に対しては、「農村もどんどん都市に対して開かれていくことが考えられますが、そうした時に、農村の秩序維持のやり方もある意味でより行政的なものになっていくのか?」、「村での党の役割や性格が改革開放以降、変化があったのかどうか?」、「村落社区のモデル、つまり都市社区の農村での適用について、農村の多様性や、個人的つながりを重視した問題解決プロセスが強い世界の中で、どこまで浸透し根付いていくか?」といった質問を出した。

続いて、陳鳳先生からは、「本巻第5章につ

いて著者は自治についてどのようなイメージをもっているのか？」、「第6章については、村民の利益の均衡のバランスが崩れた時に私営企業の関係、村民委員会の関係はどうなるのか？外部の力を借りずに解決可能であるのか？」といった疑問を持ちながら、全体として各著者が自治に対してイメージがバラバラであるとの印象を受けたという。その意味で第8章の南先生の論文は、自治の概念構築の上で非常に重要であり、今後の方向性や課題を与えてくれたと述べた。

回答ではまず、黒田先生から、今後の中国都市社会における自治の展望について、共産党の秩序創出メカニズムについて回答した。社区居民委員会、業主委員会、物業管理会社という三つのアクターの中で、自治がどうなっていくのかを見る視点が必要であると考え。中から下くらいの階層の住民が住む社区では、「社区」サービスに依存しており管理を巡る集合意識が育つ可能性が高いのではないかと考える。今後、共産党の秩序創出メカニズムが簡単に崩れるとは思えない。以上のように述べられた。

また、南先生からは、本巻の執筆にあたり、各著者には自治についての定義づけをしなかったために、それぞれの自治イメージで論文が書かれたが、むしろそれをぶつけてみたいと思った。さらに、日本人の色眼鏡を意識化して、自治について考えてみたいと思った。都市と農村の混住状態が起こっている中で、「農村社区」という都市と似たような管理方式が出てきた。一方で、自然集落に根ざしたコミュニティという意味での農村社区モデルというものもあり、これまでの村民自治の行政村の単位では上手くいかなくて、新しい単位を作りたいがどこに持っていったらいいかという現象が起きている。今後、都市の社区と農村の社区をすりあわせて考えると面白いテーマになるのではないかと述べた。最後に党員の役割については、党

支部の書記は目立っているが一般党員はどうかという部分もあると回答した。

続いて、第六巻『転換期中国における社会保障と社会福祉』である。まず、賽漢卓娜先生より、総評として、中国の変動中の重層的で複雑な社会保障を歴史面、制度面、現実面などから緻密に分析し、理念体系を丁寧に描き出すことで、初心者にとっても理解への道筋を示し、とくに一枚岩的な社会主義国家像に慣れた日本人にとっては、より社会現実に近づかせる契機を与えてくれると述べた。そして、「老幹部や大学教職員など一部の都市高齢者や退職者を代表とした一部の都市では、現時点での社会福祉の目標が実現していると理解しているのか？」、「中国を含めた「東アジア型福祉モデル」は成立するのか？またその場合に家族主義を避けて通ることが出来るのか？」、「男女平等の社会理念が浸透している中国でも今後、女性を対象とした保障制度の構築の必要性はあるのだろうか？」といった質問が出された。

松戸先生からは、本巻全体で貫かれているテーマは「中国で皆保険制度、皆年金制度は可能であるか？」であろうと説明した。そして、「権利意識や法律意識の強い中間層が社会保険制度の改正に対して、どのような潜在的なパワーをもっているのか？」、「所得の再分配の問題について年金制度、医療保険制度の財政方式が、現在、賦課方式と積立方式の併用を採っているが、社会保障制度の改革で富の再分配を考える時に、そうした積み立て方式での個人口座制への執着をどのように考えるべきか？」といった質問が出された。

回答は、まず袖井先生から、家族主義については、これを東アジア的と言っていいのかどうか、むしろ家族主義は発展段階の低い国において強まり、発展に伴い弱まっていくと考える。中国の場合は、家族主義が語られるのはやはり社会保障の枠組みがまだ整っていないからで



はないか。今の段階では、皆年金、皆保険は不可能であると思う。だからこそ、家族的なことを強調するのではないか。最低保障は国で、それ以上は民営化というようなモデルになっていくような気がする。積み立て方式についても同様であろう。女性福祉もこれからの問題であろう。女性福祉は確立されるだろうし、ジェンダースタディーズの今後の展開にも期待したい、と語られた。

陳先生は、中国文化からのサポート、伝統的な福祉理念が中国の人々の中に根付いていることを指摘した。そして、毛沢東の時代に都市部だけで適用できる限定的な福祉の制度が構築された。しかし、一部の都市ではなく、一部の階層の人々に社会福祉の目標が実現しているという現実がある。公的資源享受のアンバランスが依然として続いている。こうした限定性を克服して普遍的な全国民向けの福祉を構築することが課題であると述べられた。

最後に、第四巻『分岐する現代中国家族』である。先ず、金戸先生からは、第一に本巻の三つの論文でも強調されていた女性の社会的ネットワークの強さについては、中国家族の特徴をなすものではないかと感じた。親が娘の子供を預かるといったことが普通のこととして受け入れられるような社会的ネットワークの強さは、女性や若者の向上心を支えているのではないか。第二に、婚姻観の急速な多様化について非常に興味深く感じた。本巻では女子学生の結婚観についての論文があったが、一方で男性の側についても突き詰めていくともっと広がっていくのではないかと感じた。第三に、離婚の増加に関連した中国の家族を引き裂く都市と農村の二重構造は、中国特有の要因であるという印象を受けた。また、他の中華世界との比較を通して相対化或いは浮き彫りになる部分があるのではないか。さらには、その周辺にある沖縄やヴェトナムにまで射程を広げていく

と、中国家族の地域のバリエーションがもっと明確になるのではないかと述べられた。

続いて、鈴木先生からは、改革開放以降、中国家族が多様化しているという論調に対して、実際は中国人が共通して持っている変わらない家族の考え方があるのではないかと読み取った。そして、本巻は、家族の解体、つまり個人化ではなく、「社会圈子」としての家族を考察するという意義があるのではないかと述べられた。

回答として、首藤先生からは、本巻でやりたかったことは家族制度論であった。広い社会関係の中で家族を捉えなおしていくことが必要なのではないかというのが、本書のコンセプトであった。女性の社会的ネットワークの強さに関しては、人口学的な条件と共に、政策的な条件もあり、データからどうやって読み取っていくのかは今後の課題になるであろう。また、中華世界との比較、中華世界への外縁への適用可能性に関しては、家族制度、関係性、集団性、規範性、実践性という軸を立てることにより、ある程度普遍的な分析枠組みになりえているのではないかと述べられた。

以上で全てのセッションが終わり、シンポジウムの最後では、監修者である中村先生により、全体的なリブライがあった。中村先生は、叢書全体の方針として、「中国社会を素材として世界史の潮流をにらんだ新たな社会の構想を提示して欲しい」、また、「国家権力と市場経済の問題提起ということ念頭においてもらいたい」、「日中の相互理解に配慮する」、「実証研究で行って欲しい」という要望を各巻の編者に出されたという。そうして、各巻で、これまでの潮流と新しい社会との様々な「せめぎあい」が見られたのだと述べた。

## 第 30 回総会報告

事務局（首藤明和）

開催日：2009年6月7日（日）

場 所：名古屋大学

中村会長からの開会の挨拶に続き、長田洋司  
会員が議長に選出され、議事に入りました。

### 第 1 号議案 2008 年度事業報告

以下の各項目について、事務局および各担当  
理事より報告がなされました。

1. 研究大会の開催  
08.6.7～8（流通経済大学）
2. 機関誌『日中社会学研究』第 16  
号編集発行（300部） 08.10
3. 『21 世紀東アジア社会学』創刊  
号発行（300部） 08.6
4. 「ニューズレター」発行  
53～55号：08.05, 08.11, 09.03
5. 理事会開催 2回 08.6.6, 08.12.13
6. ホームページの運営
7. 会員概況 入会 14名, 退会 4名  
（2009年度4月から現在に至る  
入会 10名, 退会 0名）  
現会員 208名（一般 110, 学生 98）
8. 機関誌編集委員会報告
9. 研究委員会報告 冬の研究集会  
（神戸華僑会館） 08.12.13
10. 海外でのシンポジウム開催  
（中国・中央民族大学）09.3.27～28

### 第 2 号議案 2008 年度決算報告

会計担当理事より、以下の資料にもとづき、  
・一般会計報告、・第 20 回大会・第 29  
回総会特別会計について、報告がなされました  
（備考については略してあります）。

## ・一般会計報告

収入総額	1,367,595
支出総額	739,514
差し引き残額（次年度繰越金）	628,081

### 残額内訳

郵便局定期預金	300,000
郵便振替口座	131,280
郵便局普通口座	143,294
現金	53,507

### 収入の部

費目	予算額	決算額	増減額
前年度繰越金	655,113	655,113	0
会費収入	650,000	703,000	53,000
機関誌販売	25,000	9,000	16,000
雑収入	1,000	482	518
合計	1,331,113	1,367,595	36,482

### 支出の部

費目	予算額	決算額	残額額
機関誌制作費	500,000	403,200	96,800
ワーキングペーパー集 制作費	150,000	217,980	67,980
学会コース経費	20,000	0	20,000
事業費	5,000	0	5,000
事務費	70,000	34,178	35,822
通信費	100,000	71,556	28,444
会議費	50,000	12,600	37,400
大会補助	50,000	0	50,000
予備費	386,113	0	386,113
合計	1,331,113	739,514	591,599

### ・第20回大会・第29回総会特別会計

日時：2008年6月7日・8日

会場：流通経済大学

大会会計担当者：根橋正一・東美晴

収入総額 186,000

支出総額 186,000

残額 0

#### 収入の部

大会参加費 66,000

懇親会費 120,000

計 186,000

#### 支出の部

懇親会費 120,000

運営費・事務費・茶菓 6,965

アルバイト料 59,035

合計 186,000

上記の通り報告申し上げます

2009年4月24日

日中社会学会事務局

会計担当理事 唐 燕霞 印

江口伸吾 印

### 第3号議案 2008年度会計監査報告

監査より、以下の資料について監査結果について報告がなされました。

決算報告および会計監査報告を受け、2008年度決算が賛成多数で承認されました。

#### 2008年度監査報告

帳簿、預金証書、支出証拠書などを監査した結果、いずれも適正に処理されていたことを報告します。

2009年5月20日

監査 鍾 家新 印

富田 和広 印

### 第4号議案 2009年度事業計画案

以下の各項目について、事務局および各担当理事より事業計画案の説明がなされました。質疑応答を経て、賛成多数により承認されました。

1. 研究大会の開催 一橋大学開催
2. 機関誌『日中社会学研究』  
第17号編集発行，第18号編集
3. 『21世紀東アジア社会学』第2号  
編集発行
4. 「ニューズレター」発行 3回
5. 研究会開催 2～3回
6. 理事会開催 2～3回
7. ホームページの運営
  - ・ コンテンツ充実
  - ・ 会員業績一覧の作成
  - ・ 会員による研究活動の広報
8. 海外でのシンポジウム開催  
中国首都貿易経済大学で開催  
(09.9.12)
9. 中長期構想の策定  
研究活動の一層の充実に向けて
  - ・ 小中高大連携
  - ・ 各エリアでの研究会の開催等
10. 北京・日中社会学会支局開設

### 第5号議案 2008年度予算案

事務局から説明がなされ、質疑応答を経て賛成多数で承認されました。

収入の部

	予算額
前年度繰越金	628,081
会費収入	700,000
機関誌販売	25,000
雑収入	1,000
合計	1,354,081

## 支出の部

	予算額
『日中社会学研究』制作費	500,000
『21世紀東アジア社会学』制作費	150,000
学会ニュース経費	20,000
事業費	5,000
事務費	70,000
通信費	100,000
会議費	50,000
大会補助	70,000
* 第21回大会への補助	
予備費	389,081
合計	1,354,081

## 第6号議案

### 次年度大会・総会の開催地・開催校について

理事会原案として一橋大学（大会実行委員長：南裕子会員）が示され、賛成多数で承認されました。

## シンポジウム報告（1）

### 首都経済貿易大学・日中社会学会共催 国際学術シンポジウム・イン北京 「中日経済・社会国際学術フォーラム」

陳捷（愛媛大学）

2009年、中国は建国60周年を迎えた。この記念すべき年に、日中社会学会は、中国の首都経済貿易大学金融学院とともに、9月12日「中日経済・社会国際フォーラム」を開催した。日中社会学会の海外開催国際シンポジウムとしては、同年3月に中央民族大学で開催したものに続いて、今回が2回目であった。中国の首都経済貿易大学にとっても、新しい国際共同研究のモデルを確立するチャンスであった。日中双方は、共通論題を設定するなかで、白熱した議論をおこない、今後の共同研究のあり方について新たな道を開くものであった。

今回の国際学術シンポジウムの特徴は多学際、多研究分野の研究者が参加し、多視点から日中両国の経済・社会の問題を研究し、その研究成果を公開することにあった。

日中社会学会は中村則弘会長をはじめ、6名の会員が出席し、5名が報告した。中日両国の研究者は150名が出席した。



（日中社会学者共同写真）

会議プログラム：

2009年9月12日（土）

開会式：

来賓挨拶：

郝如玉（首都経済貿易大学 副学長）

王曼怡（首都経済貿易大学 科研処長）

中村則弘（日中社会学会会長 愛媛大学）

司会：蒋三庚（首都経済大学金融学院長）

#### シンポジウムPART 1

司会者：陳捷（愛媛大学）

報告者：

王曼怡（首都経済貿易大学）

中村則弘（愛媛大学）

馮喜良（首都経済貿易大学）

李尚波（桜美林大学）

唐偉霞（首都経済貿易大学）

#### シンポジウムPART 2

司会者：馮喜良（首都経済貿易大学）

報告者：

本田親史（明治大学）

呉世亮（首都経済貿易大学）

高杰英（首都経済貿易大学）

宋雅楠（河北大学）

#### シンポジウムPART 3

司会者：中村則弘（愛媛大学）

報告者：

鄭南（中部学院大学）

張欲暎（首都経済貿易大学）

胡朝拳（韓山師範学院）

李文中（首都経済貿易大学）

陳捷（愛媛大学）

閉会式挨拶

謝太峰（首都経済大学金融学院副院長）

陳捷（愛媛大学）

## シンポジウム報告（2）

### 言語・ナショナリティを超え大いに刺激に 台湾、北京での 国際シンポジウムに参加して

本田親史（明治大学・法政大学兼任講師）

09年8月28-30日に、今年で3回目を迎えるCritical East Asian Forumの一環として台湾で行われたシンポジウム「Subjectivity of the Other」、そして9月11-12日の両日、北京首都貿易大学で日中社会学会との協賛で行われた「中日社会経済論壇」に参加した。

「Subjectivity of the Other」は日本、中国、台湾、韓国、米国、フランスから20人以上の参加者を迎え国立暨南国際大学人類学研究所で開催された。今回は今年の開催先であるあっただけに人類学を中心に「自己 他者」に関する従来までの視覚を自らのフィールドワーク経験から相対化・脱構築する議論が目立った。例えば中国社会科学院社会学研究所・羅紅光教授を中心とするグループは、現在中国国内で注目されている「パブリック・サービスの社会化」プロジェクトの枠内で行っている参与観察と、従来までの社会理論を結合し「自己における他者」概念を打ち出すことで従来の自己 他者二元論を乗り越えようとする試みを打ち出した。また暨南国際大学人類学研究所を中心とする台湾からの参加者は、日本による統治期以来の人類学研究の厚みを生かしつつ、同研究所の中心領域である先住民族に対するフィールドノートを踏まえながらその中における人類学者の立ち位置をも問題化していく方法論を提起した。

日本からの参加者の議論もおおむね、フィールドワーク・参与観察に基づいたものが多かったのだが、その中では手前味噌ながら私の発表

は色合いの異なるものであったと思う。私の発表は、今年4月に台湾を題材に制作・放送された「NHKスペシャル～アジアの一等国」の内容と、台湾で昨年ヒットした「海角7号」のディスコースを比較分析しながら、現在の台湾における日本表象が、その植民地統治への描写も含め、脱歴史化の方向へと移行しつつあるのではないかという問題を提起した。「直球」であったためか会場では用語確認以外の質問は出なかったのだが、その後の交流の際に中国、台湾、フランスなど様々な立場から率直な意見が寄せられ、今後の参考になった。これも含めて今回の会議は、ナショナリティ・言語を超えて率直な意見交換が行われ、意義深かった。ただし私個人としては、学術的な次元での通訳を務めることは難しく、自分の語学力の限界を思い知らされたが、それも含めて今後に向けての課題が明らかになった点でありがたかった。

31日は今回の参加者の大半が周辺の仏教施設や有名な観光地である日月潭見学などを行った。特に日月潭では先住民族の集落地にお邪魔させていただき、その中で台湾における先住民族政策の変遷とナショナルディスコース・アイデンティティとの関連について貴重なお話を伺うことができた。以上の日程の中で実は最もお世話になったのは、暨南国際大学の諸先生方のみならず、院生を中心としたボランティアの方々である。この場を借りて深く御礼申し上げたい。

Critical East Asian Forum はこれまで中国大陸、香港、そして今回の台湾と開催されてきており、来年は日本での開催になるようなので次回も積極的に関わっていきたくと考えている。

一方、その後に北京で行われた「中日社会経済論壇」もまた、台湾でのシンポジウムとは違った意味で自分にとって刺激になるものであ

った。この場において私は、先に台湾で発表した、日台間でのサブカルチャーを通じての歴史認識風化の事例を踏まえつつ、中国大陸で近年注目を集めている「80后」(80年代以降生まれ)世代に触れ、この歴史認識の風化が世代を追うにつれ日中間にも起こりつつあるのではないかという点、またその文脈において表面的にはいわゆる「親日」「反日」という形態を取りつつも中台の若年層間に共通の状況が生まれつつあるのではないかという点、しかしながら一方でかような状況下における交流の中では歴史認識における敏感な問題は避けることはできるとしても真の意味での相互理解は生まれないのではないかという問題点を提起した。

このような私の問題提起に対して北京では、台湾の時と違って、予想外にストレートな反応を得ることができたのは大きかった。首都貿易大のこのときのシンポジウムは同大学の学部生を中心に外部にも公開されて行われたためざっと50人規模の比較的多数のオーディエンスに聞いていただいた。このうちの一人である学部学生からは「80后」はすでに中国国内では旬を過ぎたトピックだ。彼らがまだ日本に対する政治性を残した世代であるとするれば、最近話題になっている「90后」は純粋に日本発のサブカルを楽しんでいる世代であるがどう思うか」との質問がなされたので、この質問をきっかけにさらに持論を展開することができた。またこの時ある中国側教員の方が、ちょうどご自身が日本滞在時にいわゆる「反日デモ」についての日本のテレビ報道を目にしたご経験を紹介され、このお話を契機に、いわゆるメディアの情報が進めば進むほど国際間の「経験交流」が阻害されていく「メディア・ディスコミュニケーション」が進展していくのではないかという仮説的な感触を得たことも大きい。

この「中日社会経済論壇」では中国側の報告

は金融関係がメインであったため、正直分かりにくいところもあったのだが、セッション前後の食事の場などでは報告を離れた形で大いに交流を深めることができた。この点においても主催の首都貿易大学の関係者の方々、ならびにセッティングいただいた愛媛大学の中村先生、陳先生には改めて感謝申し上げます。

以上のように 2 回の国際会議への出席という経験は大いに私にとって刺激になるものであった。この経験を糧に今後の活動に生かしていくと同時に、来年度以降も可能な限り出席したいと考えている。

## 北京日記(2)

李 妍焱 (駒澤大学)

5月4日

### 大人の「ちょっとしゃれた」北京ライフ

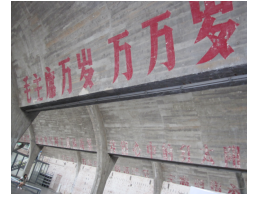
5月の連休を利用して東京の友人が遊びに来ています。今日は北京で最もホットなエリアの一つである「798 芸術区」を案内しました。ガイドブックにも載っていますが、故宮博物館や万里の長城とは明らかに異なる、一風変わった観光地です。元は国営 798 電子部品工場、1950年代にソビエトの援助によって、東ドイツの設計と施工で建築された Bauhaus 式の建物だと言われています。Bauhaus とはドイツにある建築設計学院の名前であり、現代建築設計の幕開けを象徴する存在だと言います。そんな風格の建築はアジア全体でもあまりない貴重なものだと、芸術区のホームページで知りました。



芸術区が成り立った経緯を見ると、きっかけはこの独特の建築風格によるらしい。

2000年に798工場が他の工場と合併した際、工場の建物を賃貸に出した結果、建築のユニークさに魅せられ、多くの芸術家がアトリエと店舗用に入居するようになりました。「工場」という最も芸術から遠く離れた空間が、逆に芸術の中心地へと変身しました。現在798芸術区にはアトリエ(中国語では「×工作室」と名付けることが多い) ギャラリー

一、手芸品を扱う店舗、文化産業に携わる小さな会社のほかに、オープンカフェや個性的な内装と特色料理を売りにするレストランも点在しています。「毛



沢東万歳」「抓革命、促生産」などの社会主義中国を象徴する標語がそのまま建物の壁に残されており、外の市場経済に飲み込まれなかった「無垢」な空間という印象を人に与えるところも、きっと芸術家たちを引きつけた魅力でしょう。社会主義イデオロギーは、今の中国ではもはや芸術と同次元のものになったのかもしれない。どこか理想主義的で美しく、懐かしくて郷愁を誘うもの、人の心に甘酸っぱい余韻を残すもの・・・

タクシーの運転手さんに「798に行ってください」と告げたら、「798のどこら辺ですか」と聞き返されてしまいました。北京の施設はどれも半端じゃない巨大さであることを忘れていました。「798の中の適当なところ」と言うしかなく、その後はひたすら歩きさまようのでした。

しかしここは歩きさまようのにぴったりの場所でした。敷地内のきわめて分かりづらい



案内板と繰り返しが闘った結果、芸術区の全体像が見えてきました。乱暴にまとめる  
と北から南にかけて

「T」字の形になっているようで、上の横棒に当たるのは A、B、C の三つの区域、縦の棒に当たるのは真ん中の D 区と下の E 区です。最もギャラリーやアトリエ、店舗などが集中す



るのがD区で、ガイドブックでおなじみの「見どころ」はE区に多い、という印象です。たとえば、E区の代表的な建物の屋根にぶら下がっている裸の中年男性キューピット（筋肉



隆々の体に翼が！）昔の機械類が飾られたままの、大きな吹き抜けとなめらかな斜め天井を誇る展示

室。芸術区は丸ごと個性を競う大舞台だといっても過言ではありません。随所に変わった彫刻や飾り、洗練された内装と空間の遊びが発見でき、芸術家たちの苦心に心が揺さぶられることしばしば。歩き疲れると、これはまたパリの街角かと彷彿させる居心地の良さそうなカフェが何軒も。ゆったりとカフェを楽しんだ後、D区の一隅にある小さなお土産屋さんに立ち寄りました。まるで東京の青山に点在するようなしゃれた店の隣に、懐かしい社会主義グッズ（とでも言うべき品々）を扱う雑貨屋さん。「おいらが悪かった！」と「おいらは良い子～」とどでかく書いてある真っ赤なまん丸いマグネットを娘へのお土産に買っておきました。住環境と高層ビル群に関しては、北京はとうに東京を超えている感はあるのですが、本当に大文化都市東京に対して誇れるスペースとして、この798芸術区は絶対に外せません。

東京よりも、北京のほうが、大人の楽しみが多い街だと思えます。特に近年の新しいおしゃれスポットは軒並み外れがありません。商業スポットとしては、「ここはニューヨークか！」と思わせる「三里屯ヴィレッジ」。「ここはロンドンか！」と思わせる高級ショッピングモール「世貿天階」(そのトレードマークが、アジア一の規模を誇る天井型液晶大画面「電子夢幻天幕」、長さ250m、幅30m、建設費2.5億元！)。「ここは東京か！」と思わせるビ

ジネスと食事、ショッピングのテーマパーク「建外SOHO」(ポプラ社の絵本屋さんも入っています！)。「ここぞ北京！」と思わせる美食エリア「南新倉」は、明の時代に穀倉として使われた重厚な古代建築をそのままレストランに改築し、品格と個性と伝統と文化そして美味を味わわせてくれます。「これぞ名所！」にふさわしい中心部の「後海」バー・ストリートも、「老北京(古い北京)」の匂いが充満する「胡同」に囲まれながら、江南を錯覚させる湖と柳と石橋に面して、伝統的な四合院を改装して作られた魅惑的空間。入り口横に掲げられた「VISA」の青い看板だけが、訪れる人を現実世界に引き戻したりします。

流行のスポットをさまようことが俗っぽいとおっしゃるなら、隠れ家的なブックカフェに足を運んでみてはいかがですか。「新京報」でその特集を読んだときはよだれが出そうでした。以下のブログには、2006年の時点で営業していた北京のブックカフェがまとめられています

(<http://old.blog.edu.cn/user2/goudan/archives/2006/1603310.shtml>)。主旨も趣も本のジャンルも違うこれらのカフェは大人の心を和ませるに違いありません。チベット族の青年がオープンした「古格书吧」ではチベット族の飲み物「酥油茶」をメニューに加え、週末の夜はチベット学セミナーをやっていると言います。映画関係の本、撮影関係の本など、ジャンルの傾向がはっきりしている「専門的ブックカフェ」もあります。読書だけではなく、音楽会、展示、映画上映会、サロン、セミナーと活動も実に多彩。「文化人」的の自分に心酔したくなったら必ず訪れてみたいと決意しました。

北京、好きかもしれません。

東京では見あたらない大人の遊具も（変な意味ではなくて）日本人が見たらうらやましがらるはず。実際東京からきた友人は「いいなあ」を連発しました。ほとんどすべての住宅団地、公園、あるいはちょっとした街角に、これらの遊具が設置されています。遊具というよりも、健康器具といったほうが適切かもしれません。「人体科学」に基づいて製造されたと言うこれらの健康器具を、誰でも、いつでも自由に使って、体を鍛えることができます。いわば「街角スポーツジム」です。我々におなじみの一人で黙々と鍛える「スポーツジム」と一番違うのは、健康器具のコーナーには、隣人に友人に家族、実に賑やか、



ということです。特に夕飯が終わる時間になると、そのあたりは自然に人々のたまり場になります。体を動かす。人と談笑する。高級ショッピングモールでの買い物やしゃれたレストランでの食事、そして個性カフェでの読書タイムよりも贅沢な一時ではないでしょうか。

余計なお世話でしょうが、オリンピックを招致する資金があれば、東京でもこんなすてきなコーナーを山ほど造れるはずですよ、石原さん。

5月9日

### 健康万歳

今朝の散歩で出会った「とっておき」は、裸足でウォーキングするおじさんと、「見かけによらず」ひょいっと足を頭と同じ高さに上げていた中年女性を挙げなければなりません。

その中年女性は実に驚異的でした。いつものように私は健康器具コーナーの「足ゆらゆら器」で必死に足を漕いでいた時です。ちら

っと横の「両手でまわるまわる器」を見たら、彼女がいました。普通の人



の肩に当たる高さの器具に、彼女は華麗に足を乗せ、いとも簡単に脚を頭と同じ高さに持っていきまし

た。私の目はもうまん丸です。彼女は決してスリムとは言えません。最近はやりの「メダボ健康診断」では引っかけりそうなウェストのサイズです。しかし、足は上がったのです。「人は見かけによらず」という言葉の意味を、再認識しました。

朝の公園で出会う人々の健康法は実に多種多様で、感心と納得と首をかしげる、の繰り返しになります。前から怪しいと思ったのは、大きく拍手しながらウォーキングするおじいちゃんでした。手のひらが真っ赤になっていながらも、とにかく叩きつけていました。今日の裸足おじさんは、ウォーキングロードをべたべたと颯爽と歩いていました。時々ぞかせていた真っ黒になった足裏は、本当に気持ちよさそうでした。これからの季節、きっとこれは良い健康法に違いありません。

健康ブームは今の中国ではもはや生活の一部です。何千年も自然とつきあってきた中で培ってきた知恵もあれば、市場経済に毒されて横行する「劣悪食品」への「科学的対策」もあります。その多くはいわゆる「口コミ」で広がった民間の知恵と製品です。伝統的な漢方やツボマッサージ、鍼灸などは日本でもよく知られていますが、たとえば同じマッサージでも「捏脊（背骨をつねる）」という民間療法があります。背骨に沿って腰あたりから、肉を骨から引き離す感じでつまみながら首へと押していく。これはかなりの痛さを伴いますが、中国ではファンが多いようです。キクラゲを一日5グラム食べれば、コレステロールを下げられる、緑豆を食べれば火照りは治

る、毎日5個ナツメを食べれば100歳まで病気がない・・・これらの食の知恵をくどく子供に伝えるのが、中国の母親の愛情表現なのです。

最近の健康関連の話題は何よりも当初「豚インフルエンザ」として知られる「甲型H1N1インフルエンザ」の予防に関するものです。SARSを経験した中国は新型インフルエンザに対して素早い反応を見せ、入国してきた発病者とその「密接接触者」への追跡はまさに「徹底的」。当然のごとくプロフェッショナルとアマチュアを問わず、「予防に効く」とされる「プチ知識」があちらこちらから聞こえてきます。数日前、衛生部部長が豚肉の汚名挽回を図るため、豚肉の煮込み料理でおなじみの調味料、「八角」は、インフルエンザ特効薬タミフルの原料の一部となっているため、八角で煮込んだ豚肉を食べたら予防効果があるに違いないと発言。実際鳥インフルエンザの時も八角の値段が急上昇したと言われています。(残念ながら、「直接それを食べても効果はないよ」と、後日専門家に否定されてしまいました・・・)

「劣悪食品」への「科学的対策」分野でのチャンピオンは間違いなく

「果物野菜解毒機」です。北京生活を始めてすぐ、我が母から郵送で大きな荷物が届きました。開けてみると、腕いっぱい抱えられるほどの「小型洗濯機」が



出てきました。使い方も洗濯機と全く同じで、野菜や果物類を入れ、水を入れ、時間を計るタイマーを回す。終了したら排水し、ぴちぴちになった野菜を安心して召し上がれる、というわけです。仕組みは分かりませんが、オゾンを発生させて解毒するとのこと。疑心暗鬼ぐせのあるわたしでも一度使ってみるとそ

の効果てきめん加減にびっくり。農薬などの毒が消えたかどうかはともかく、野菜はしゃきとなったのですもの。これはやめられません。

朝の運動に漢方にマッサージに解毒洗濯機、北京っ子の健康法は奥が深い。しかし、最高の健康法を、予期せぬ場面で私は見つけてしまったのです。

昨日の朝、公園で妙なおじさんに出会いました。見た目から判断すれば年齢は50代後半か60代。よく焼けた労働者風の顔と坊主頭、そして腕には衰えを見せない筋肉。そのおじさんは間違いなく女装をして闊歩していました。ピンクのキャミソールは、10代の娘たちが良く身につけるタイプ、胸元にきらきら光るビーズの飾りが縫い付けられています。下は赤のミニスカート。驚異的な短さなので、ミッキーマウスの柄がプリントされた下着がちらちらと見えます。薄手のソックスも白の革靴も女性ものに違いありません。手には、男性者の服が入ったビニール袋が提げられていました。たまに向けられる好奇の目にめげることなく、おじさんは堂々と散歩と健康器具を楽しんでいました。

不覚にも一瞬あっけにと取られた私でしたが、深い感動を覚え、鳥肌が立ちました。だって、ほんの15年前、私がまだ暮らしていた時の中国では、こんなおじさんの存在など決して目にすることができなかったから。公園を出る前におじさんは男装に戻るのかもしれませんが。しかし少なくともこの包容力のある公共空間の中で、おじさんは自由を満喫しています。おじさんにとって、これ以上の健康法はあるのでしょうか？

5月18日

北京っ子の収入はいいいくら？

518という数字の並びは中国人の最も好

きな並びです。中国語の発音では「我要癡(私は儲かる!)」に酷似しているからです。今日はお金の話をするのにぴったりの日です。

他人の懐を探ることは、常にどきどきわくわく感を与えてくれます。日本人はたいてい素直ではないのでそれを認めようとせず、「品がない」などと毒々しい言葉でこの正常なる好奇心を抑圧しようとしています。かつて中国では、相手に収入を聞くことはそれほど憚れることではなかったと思います。「中国人はもっと自分の気持ちに正直でびげら」と私は考えていました。しかし、認めざるを得ません。その分析は間違いでした(実は、収入なんてみんな似たり寄ったりだったからです)。

今やホワイトカラーの皆さんは、直接面と向かって、収入を教えてくれることはほとんどありません。それどころか、その話題に触れられない「空気」を創り出す人のほうが多いようです。知りたければ「傍敲側撃(回り道して攻める)」でいくしかありません。つまり、一般論もしくは共通の知人の例を出して探る、という手です。この際、私の重要な情報筋は、娘のバレエクラスの友達のお母さんです。

彼女は40代前半で典型的な知識人的「中の上」階層の一人。夫は大学教授で、彼女自身もCBD地区に近いガラス張りの巨大ビルで、ワンフロア丸ごと占めている道路情報通信器機系の会社に勤めています。娘たちをマンモス展に連れて行ったときにさりげなく、今の北京市民の収入は2003年頃に比べたら「倍増したんじゃないのかな」と探りを入れてみました。2003年頃の月収でいえば、5000元あれば悪くないほうだと思ったからです。「そんなもんじゃないわよ。その何倍もだよ」と彼女は当たり前のように答えました。彼女が言うには、ある程度の管理職なら年収30万元(約450万円)以上でも普通、年収50万元(約750

万円)も相当いるし、「大きい会社の重要な部門の部長なら、100万元(1500万円)の人だってざらにいるのよ」とのこと。実際、彼女の二人の弟はいずれも年収100万元以上の部類だそうです(うち一人は遙かにそれを超えている)。彼女の社交圏の人たちは、大体このような収入になっているといえます。

私の貧しい想像力を軽く超えた数字でした。北京統計局が公表したばかりのデータとはあまりにも一致しないからです。1月~5月に至るまでの北京市民一人あたりの可処分所得は11421元、昨年度同期より8.2%も増えたとはいえ、3人家族で計算すれば、5ヶ月分の可処分所得は34263元となります。30万元の年収があれば、5ヶ月分の可処分所得はこの倍以上はあるはずです。

彼女の社交圏が特殊なのでしょうか。これについては目下のところはっきりしたことが言えません。先日インタビューした同世代の女性も、自分のことを「中の上ぐらいよ。決して上とは言えません!」と位置づけていましたが、夫と車を一台ずつ所有し、北京市内に4軒のマンションを持っていました(うち二カ所をこの春に買値の倍以上の値段で売ったそうです)。北京市民の所得は一体どうなっているんだ!と、私の卑しい好奇心がますます駆り立てられます。

様々な場面で様々な人に「傍敲側撃」した結果、確かに言えることは二つあるようです。一つは、平均値を取ったデータはまったく意味がないということです。階層によって収入に「雲泥の差」があるからです。レストランの「サービス員」、ビルがあれば必ず付いている守衛さん、清掃員などのいわゆるブルーカラーは、相変わらず月収1500元程度(もしくはそれ以下)で頑張っているし、工場で備品を組み立てる労働者もせいぜい月収2000元~4000元程度です。年収100万元の部長さんなら、

労働者の 20 倍から 40 倍、となるわけです。ちなみに日本では大体社長でも 10 倍程度です（日本のほうが世界的に特殊かもしれませんが）。

もう一つですが、これは給料の数字以上に重要です。つまり、一部の人間に関しては、「給料以外の収入の割合が想像以上に大きい」ということです。彼らは、いわゆる何らかの決定権を持っている人たちで、必ずしも幹部とも限りません。たとえば、建築関係の設計士さんなら、図面を引く際に、どこかの会社でしか製造していないような規格の機器類を一筆加えておくと、施工の入札段階では必ずこの会社が請け負うことができることとなります。つまり、設計士さんを買収しておけば、商売のチャンスが巡ってくるわけです。事前の依頼料と成功報酬が当然支払われることとなります。「バックマージンシステム」は、いかなる取引においても存在するようです。日本でも歩合制は普通にあるのでびっくりすることではないでしょうが、不透明で金額もケースバイケースという意味で、もはや制度的な給与体制となっている日本の歩合制に比べるとずっと私的で、秘密裏に行われているイメージが強いです。

バックマージンだけではなく、「金銭以外の支給」も大きな部分を占めます。最もたまげるのはやっぱり不動産の事実上の支給です。条件の良い政府機関、国営企業、大学なら、市価に比べるとタダ同然の金額で従業員に住宅を支給しています。北京では平均的なマンション価格は 200~300 万元程度なので、その分の金額をもらった、ということになります。穀物や油、野菜や肉類、各種金券などほかにも配られるものが多種多様です。「姉は国家公務員だけど、油や穀物は買う必要が全くなく、野菜は私たちにまで配りまくっているのよ」という友人の声もありました。

もう一つ見事なのは、一ヶ月にいくらという上限以下なら、「領収書」を会社に持っていけばその分のお金をもらえるという収入形式です。会社も経費として落とせるので、節税になるとのこと。会社によってはタクシー代が好まれるところ、文房具代が好まれるところなど様々ですが、接待費として飲み食いの代金も OK だそうです。あれほど街にあふれている料理屋でもみんないつも満杯なのも納得がいきます。したがって、「領収書集め」が、利益に関わる切実な努力となります。友人同士でそれぞれのために必要とされる領収書を交換し合うのは当然のこと。歩道を歩いているとよく地面に「弁証 135 × × × (携帯電話の番号)」という不可思議な広告が印字されています。なんの広告だろうと苦慮しましたが、真相は、領収書を買ってくれるところでした。道理でスーパーの前でよくおばさんに声をかけられるわけです。「そのレシート、いらないならちょうだい！」って。レシートをもとに領収書が発行され、それが売れる商品となるのです。

仕事の階層として、「ブラックカラー、ゴールドカラー、ホワイトカラー、グレーカラーとブルーカラー」という言い方があります。ブラックカラーは官僚、ゴールドカラーは高級管理職、そして一般のホワイトカラー。グレーカラーは現場監督、ブルーカラーは体力労働者。名目上の給料は、ゴールドカラーが最も良いのかもしれませんが、しかし、最も人気なのはやはりブラックカラーです。住宅も食料ももらえるだけではなく、飲み食いもみんな公費で落とせるなら、給料の金額なんてどうでもいいからです。

彼らの飲み食いも、バックマージンに支えられた強靱な市場取引が、北京経済を牽引しているのかもしれませんが。北京っ子が裕福かそうではないか、平均収入の数字はなんの役

にも立ちませんし、その人の年収の数字を見てもあるいは意味のないことかもしれません。その人は 福利厚生条件の良い職場にいるのか、バックマージンの取れる仕事に従事しているのか、を見ることが大切です。

この卑しい好奇心に勝てないかぎり、これから私は探りを入れていくでしょう。タクシーの運転手からの耳寄り情報もあります。「北京では通帳に 500 万元（約 7500 万円）以上持っている人は、100 万人ぐらいいるよ」って。本当かな・・・ちなみに、その運転手さんは月収平均 6000 元（約 9 万円）程度だそうです。「うーんと郊外じゃないと家族三人でこの収入じゃあ暮らせませんよ」とのこと。それは確かだろうなあと、私も思います。

## 北京での思い出あれこれ

宮崎 紀子

（香港中文大学日本研究学科  
Part-time Instructor）

90年代に、夫の仕事の関係で、北京に3年半ほど住んでいたことがある。後に、大学で日本語を教えるようになるまでは、どっぷり駐在員社会に浸かって生活していた。当時、外国人が遊ぶところといえば、Hard Rock Café ぐらい。その後、三里屯にカフェやジャズ・バーが並ぶようになり、我が家から歩いていけることもあって、ランチにディナーにとよく足を運んだ。マンション付近では、いつも若い人民解放軍の兵士が、隊列を組んで、パトロールをしていたのを思い出す。

私に北京暮らしのイロハを教えてくれたのは、某商社勤務のご主人を持つ J さんだ。当時、日本政府も資金を出して建てられた日中

青年交流中心には日本の茶室があり、月に3回裏千家のお稽古が行われていた。そこで出会ったのが、日本人の J さんだった。彼女とヒルトンホテルで一緒にいただいたのが、私にとって、初めての本格的飲茶体験になる。ワインを開けての自宅でのランチパーティや、市内の紅橋市場から、淡水真珠の業者を家に呼んでのアクセサリーの購買会など、いつも楽しいことを企画するのが好きな女優の風吹ジュンに似た女性だった。

北京時代は、中国料理、北京語、胡弓、書道などを習った。中でも、人民大会堂にその書が飾られているという杭州出身の先生夫妻との思い出は忘れがたい。レッスンは王羲之の書を手本とし、1回1時間半。友人と二人で習っていたのだが、費用は一回、一人30元だった。休憩の時間には、緑茶に陳皮を浮かべたものを、農村風の茶菓子とともにいただいて、おしゃべりを楽しんだ。先生の暮らしは質素で、暖房も壁にパイプを通して、熱湯を循環させ、部屋を温めるものだった。奥様は身障者で、先生がかいがかいしく世話をしていた。この奥様はなかなかのやり手で、絵が上手く、日系ホテルの売店に手描きのハンカチを卸していた。先生は毎朝、5時に起きて、公園で気功をし、家に帰ってからは書の練習、そして午後は日本人の駐在員夫人に書道を教えるというのが日課だった。

北京でのもう一つの楽しみは、中国音楽だ。ホテルで定期的に関われるミニコンサートは、チケット代が30円で、安いこともあって、胡弓や琵琶、古箏、揚琴などの演奏をよく楽しんだ。芸術系の大学で胡弓を教えている先生を自宅に招いて、家族が遊びに来た時に、ホームコンサートを開いたこともある。その時に聞いた「賽馬」という楽曲は、今でもその躍動感が思い出せるほどだ。

週3回、家の事をいろいろやってもらって

いた阿姨の W さんは、元気にしているかなと  
思い出す。50 歳代の温かな方で、FESCO を通  
して、うちに来てもらっていた。彼女が作る  
餃子はとびきり美味しかった。日本とは違っ  
て、餃子を茹で、タレが醤油、酢、胡麻油と  
いうのも、その時知った。W さんが使っていた  
麵棒は今でも香港の家にある。彼女の作るト  
マトと卵のスープも私は大好きだった。

当時は、インターネットも普及していない  
時代で、だからこそ、芳醇な中国文化にじっ  
くりと身を置けたことは、今思えば得がたい  
経験だったと思う。驚異的な経済成長を続け、  
2008 年にはオリンピックも経験し、街も  
人も大分様変わりしたが、あの頃の北京の持  
つシンプルで清々しい空気感は、いつまでも  
心に留まる懐かしい記憶だ。

## 2009 年夏 中国訪問記

大上 博右  
(兵庫県立神戸甲北高等学校  
地歴・公民科教諭)

### 再会

2009 年の 7 月に一人で上海の復旦大学を訪  
れた。この大学には私の勤務する高等学校の  
姉妹校である上海の高級中学校から多数が進  
学している。今回の訪問では卒業生達と日本  
と中国の様々な問題を話し合い、上海事変当  
時の史蹟を訪ねることができた。

“老师, Long time no see!” ホテルに迎え  
に来てくれた女子学生が話しかけてくる。こ  
の学生とは 2 年前の訪日以来の旧知の仲であ  
る。とても綺麗に成長したので返事を忘れて  
見つめていると「先生お久しぶりです。どう

ぞおかけになって下さい。」と日本語でニッ  
コリしてくれた。

### 3つの舌が欲しい

復旦以外の大学生も紹介されたので「你们  
早上好！」と 3 日前に覚えた中国語で挨拶を  
した。笑い声と拍手が起きて初対面の緊張感  
がほぐれた。

学生達の専攻は医学と情報科学などである。  
夏休み等の長期休業を利用して日本語も集中  
的に勉強している。最初に話しかけてきた女  
子学生は「日本語を勉強し始めて 2 週間です。  
夏休みは 1 日 6 時間以上勉強します。医学部  
卒業時には英語と日本語をマスターします。」  
とここからは英語になった。

彼らが日本語を学ぶきっかけは、中学で日  
本のアニメに接し、高校の国際交流で(第一  
希望はアメリカの場合もあるが)日本を訪れ  
(思っていたよりも良い国なので)日本が好  
きになったからというパターンが多いようだ。  
「どうして mother tongue 以外に 2 つも舌が  
欲しいの?」と聞くと、「英語は出来て当然  
です。」「日本語で読みたい本は、アニメだ  
けではない。日本の高齢化問題に興味がある。  
中国も高齢化社会になるので日本の経験は参  
考になるはず。」だから 3 つの舌が欲しいと  
19 歳の女子学生は真剣な表情で語ってくれた。

### 復旦大学と日寇

復旦大学は中国の名門大学であり上海市の  
最難関大学である。上海交通大学の医学部の  
学生が「彼女は上海市の大学入学共通テスト  
で最も点数が高かった。2 年前には自分たちの  
高校では日本の高校への研修旅行を希望する  
生徒が大変多かった。彼女が日本に行けたの  
は優秀で先生の方から勧めたから。」と少し  
悔しそうに教えてくれた。

話をした後に構内を案内してもらった。夏  
休みの日曜日なのに多くの学生達が熱心に勉  
強している。「あれは?」「休みの日も大学



生は教室に来て勉強します。寮の部屋は狭くて夏は快適ではありませんから。」

校舎の周囲にロープが張り巡らされている。数多くの白い紙がひねられた状態で結わえてある。日本の神社で「おみくじ」を木の枝に結わえるが、よく似た光景である。

「あれは？」「この大学はとても難関なので、訪れた高校生が合格を祈願してあの紙を結ぶのです。」大学の正門からは大きな銅像が見えた。右手を肩の高さに持ち上げて空を指さしている。「あれは？」「毛沢東主席です。」見るもの聞くもの、すべてが驚きであった。私も何か言わなければと思い「立派な銅像だが、しかし」何を言うつもりかと大学生達が緊張した顔つきになる。「しかし、ずっと手を持ち上げていると疲れるのではないか心配だ。」一同爆笑した。

最後に大学の歴史資料館を訪れた。輝かしい大学の歴史と並んで苦難の歴史が記されていた。「日寇のためこの大学も避難を余儀なくされ犠牲者もでた。」以下詳しい説明がなされていた。大学生達と私は案内板の前で長い間立ち停まった。だれもが無言であった。

### ガーデンブリッジを超えて

ガーデンブリッジを渡り、虹口地区を訪れた。日本海軍陸戦隊本部・陸戦隊病院・虹口警察官舎・日本尋常高等小学校・虹口公園（魯迅公園）など事変当時と関わりの深い場所を巡った。陸戦隊本部は繁華街にある。現在は大通りに面した部分は銀行になっていた。周辺では激しい戦闘が行われ多数の市民に犠牲者を出している。「ここがそんな場所だとは誰も知りませんでした」男子学生が言う。彼は私が希望する場所に手際よく案内してくれる。数日前から交通路を調べてくれていたのだ。深く感謝する旨を述べると「我々こそ感謝します。上海の歴史的な場所についてこんなに深く知ったのは初めてです。」

私が引率する高校生もそうである。浦東地区の超高層ビル群の夜景に「きれい」とはしゃぎ、対岸の旧共同租界地区の優雅なビル街に何故か「かわいい」と言うが、視線は蘇州河を超えることはない。ガーデンブリッジは今も昔も境界線である。

一日中歩いて疲れ切ってしまい魯迅公園のベンチで目を閉じた。確か77年前にこの公園で朝鮮人男性が爆弾を投げて日本の陸軍大將らが死んだのだ。大山勇夫海軍中尉が保安隊に射殺された事件。一般市民を巻き込んだ海軍陸戦隊と中国軍の凄惨な市街戦。空襲と黄浦江からの艦砲射撃で燃え上がる上海。捕虜の処刑や便衣隊と疑われた一般市民の殺害など後の南京を思わせる光景。私の思いは公園に戻る・・・日本軍は公園の建物も破壊した。

“老师,Are you exhausted?”と笑われて目を覚ました。公園は老若男女であふれている。若い男女はベンチで語らい、中高年は、大音量のカラオケにあわせてダンスを楽しんでいる。歴史を忘れそうになるほど平和な光景であった。

### 別れ

次の日に一人で書店巡りをした。上海書城で「中日关系史 1 - 3 / 中国社会科学院中日历史研究中心文」など数冊を購入した。中国側の視点からの上海事変と南京事件を確認するためだ。受験参考書のフロアは母親と子供であふれ、英語教材のアナウンスが繰り返されていた。「アメリカは唯一上海を攻撃しなかった。だから皆アメリカが好きです。」女子学生の言葉を思い出した。歴史的事実とは少し違うが私は黙っていた。

帰国後同じ学生からメールが来た「仲間達は皆、老师のことを好きで尊敬していると言っています。」私も長い返事を書いた。



---

日中社会学会ニュースレター No.57

発行：日中社会学会事務局

〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942 - 1  
兵庫県教育大学・首藤明和研究室  
info@japan-china-sociology.org  
shuto@hyogo-u.ac.jp  
tel・fax: 0795-44-2165 ( 研究室直通 )

( 事務局・業務補佐 ) : 吉岡智子  
nicchu-jimukyoku@tau.e-catv.ne.jp  
tel・fax:089-927-9366

日中社会学会・郵便口座  
口座記号番号 : 00140 - 9 - 161801  
加入者名 : 日中社会学会

日中社会学会・公式 HP  
<http://www.japan-china-sociology.org/>

発行日 : 2010 年 1 月